

## 会員の広場



2021年(令和三年) 丑年について

田川 修司(東京)

最近は新しい年を迎えるにあたり、普段はあまり関心を示さない干支について、ことわざとか格言とか話をまとめる事を行っています。

ことわざには、さまざまなもの見方があり、不思議に人を引き付ける力があります。厳しい表現もあれば、くだけた表現もあります。調べてゆくとその誕生は古く、そして長

から、丑年は「我慢(耐える)」や「発展の前振れ(芽が出る)」を表す年になると言われています。

牛といえば昔からのんびりキャラ。その要因のひとつが、いつものどかに口を動かしていることです。実生活においても解りやすい「草木も眠る丑三つ時」「土用の丑の日」「牛耳る」「牛に経文」とか使われています。

その他の諺ですが、【のろい牛】「牛歩」「牛に乗って来た」「牛の道行き」「遅牛も淀、早牛も淀」「牛の歩みも千里」【長い牛】「牛のよだれ」「牛の涎は百里続く」「商いは牛の涎」「牛の小便」「牛の小便十八町」「牛の小便と親の説教は長くても効かぬ」【強い牛】「食牛の気」「牛を食らう気」「牝牛に腹突かれる」【役に立たない牛】「牛に経文」「牛に麝香、猫に小判」「食ってすぐ寝ると牛になる」【牛の角】「牛の角突き合い」「牛の角に

く語り継がれてきた歴史を感じたりして楽しいことです。(約180くらいまとめました)

2021年(令和三年)はウシ(牛・丑)年です。漢字では「牛」の他に、十二支では「丑」と書く。丑(牛)は昔から神にささげられる重要な生贄であり、古くから食牛や乳牛、耕牛と呼ばれ酪農や農業や物を運ぶ労働力として人々の生活を助けてくれる存在として重要な生き物です。「丑」は曲がる、ねじるという意味を持ち、芽が種子の内部で伸びきらない状態を表しているとされています。糸へんに丑と書く「紐」の字には、人々との間を「結ぶ」存在という意味も込められ「神の使い」とも考えられています。それを示すかのように全国の天満宮(祭神：菅原道真)には牛の像があります。丑年は、先を急がず目前のことを着実に進めることが将来の成功につながっていくといわれています。また、大変な農業を地道に最後まで手伝ってくれる様子

蜂「角を矯めて牛を殺す」「牛は角を見て買ひ人は言を聞きて用う」【導く牛】「牛に引かれて善光寺参り」「隠悪の僧死して牛に生を変ゆる」【牛と女】「女が口上を使えば牛の値が下がる」「女賢くて牛売り損なう」「女と利発牛の一散」等々色々あります。

今世の中では、武漢発の新型コロナウイルスがまたたく間に世界へと広がり、日本も未だに見通しの付かない大変な日々の中にあります。世の中を大きく変えた新型コロナウイルスが、このまま終息に向かうことが出来るようになるのかとても気になる年です。「雨ニモマケズ」でよく知られています詩人・童話作家の宮沢賢治さんの『世界全体が幸福にならないうちには個人の幸福はあり得ない』と、他の人と共に生きていく事はどういう事なのかという事をしみじみ考えさせられます。(牛・丑のことわざに興味のある方は事務局に連絡くださいれば資料を提供します)。